



【m-HANDS 2023 の報告】

中国ブロックでの指導医養成の報告

出雲家庭医療学センター大曲診療所 藤原和成

広島大学病院 総合内科・総合診療科 小林知貴

岡山家庭医療センター奈義ファミリークリニック 松下明

【m-HANDS-FDF】

(modified - Home and Away Nine DayS – Faculty Development Fellowship)

8年の間継続してきた中国ブロックの指導医養成コースです。今年度もオンライン開催です。8月から3月まで、月に1回全8回のコースとして実施しています。

今年度も、JPCA-MLなどで募集して中国地方の指導医6名が参加中です。チームを作って様々な課題に取り組んでもらっています。

以下に第1回に参加してくれた指導医からの報告の一部を掲載します。

2024年度も引き続き開催を予定しています、ご興味のある方はぜひご連絡下さい。

〈目的〉

中国ブロックの指導医の養成とプログラム運営の質向上を通して、プライマリ・ケアの普及と発展をめざす

〈対象〉

- ・中国ブロックに所属しており、家庭医療後期研修を修了した医師
- ・中国ブロックの家庭医療後期研修に関わる指導医

〈アウトカム〉

Core Competence : Adult Educator(成人学習支援者)

学習者と向き合い、その学びに気を配り、学びの場をサポートできる

教育者の役割と限界を知り、学習者と協同的に学び、生涯学習者を育てる姿勢で関わる

学習者の学びを促進するための理論と技術を適切に用いることができる 参加者と講師による学習共同体の形成を勧め、ブロック内の指導医ネットワークを作る

机上のプログラム作成だけでなく、各現場での仕組みづくりや教育チーム形成ができる

総合診療の魅力やプログラムの魅力を効果的に伝えられる発信力や求心力を発揮できる

ツールの活用や工夫などで独創的で質の高い遠隔教育ができる

第6回 オンライン開催 2024年1月13日(土)

【ビデオレビュー】

今回は吉國先生、川口先生の研修医への指導場面のビデオレビューであった。吉國先生は救急外来で研修医が対応している症例について、問診の基本のOPQRSTやどのように致死的な疾患を見落とさないように考える

かを伝えながら指導をされていた。研修医が RIME モデルでどのあたりまで出来るのかを意識しながら教育すると手法も変わってくるのが議論になった。川口先生は研修医が書いた診療情報提供書を確認しながら、どのように伝わりやすい文章にするかを研修医自身に気付いてもらうような声掛けをされていた。診療情報提供書も教育の場になることや視点を変えてもらうなどの声掛けで研修医自身が成長しているのがよくわかる内容であった。(大塚裕真)

【評価計画の作成】

事前課題として後期研修医の採用のための評価計画の作成、当日グループワークとして初期研修医採用のための評価計画の作成を行った。

講義の内容を通して感じたことは、評価の目的を明らかにし、何を評価するかを決めることがとても重要であるということであった。評価の目的が定まっていない場合には何をどうやって評価するか決めることができず、またどのタイミングで誰が評価するかという点も定まらない。目的が曖昧であるために、必要な評価ができていないという状況も生じ得ると感じた。また、目的を達成するために適切な評価尺度や方法を考えることも重要であると学んだ。(川口満理奈)

【カリキュラム評価】

【カリキュラム評価】

「総合診療研修プログラムのへき地研修のカリキュラム評価」を題材に、カリキュラム評価を行った。当日はグループに別れ、「インタビューシート」の情報を元に「ステークホルダーの同定」「評価目的」「評価する側面」の順で分析を行い、具体的なアクションプランを作成した。

評価する側面は、研修目標の達成率、指導法、金銭面、費用対効果、スタッフや患者満足度…など、グループにより様々であった。

今回は普段とは異なるメンバーだったため、より視点・思考の多様性を感じられた。またインタビューシートも別々のものが用意されており、情報源や視点によりアウトカムが変化する「羅生門的アプローチ」を強く実感する課題であった。(中井翼)

【プロフェッショナリズムと態度教育】

「自身の経験したプロフェッショナルな場面」「他者からの影響・外圧で行った行動と自ら進んで行った行動」の事例について議論することでプロフェッショナリズム教育についての理解を深めた。議論を通し、プロフェッショナリズムとは単に誠実とか単に技術が優れているとかの問題ではなく、自身に求められていることを理解し、実践を継続することにあるとの理解に至った。また、外圧で行った行動と自ら進んで行った行動は明確に線引きできるものではなく、当初は主に外圧による行動であっても、必要性や有益性を理解することで徐々に内的な動機付けにシフトしていくことがプロフェッショナリズムの涵養という視点からも重要かつ理想的であると感じた。(原武大介)

第7回 オンライン開催 2024年2月10日(土)

【模擬ティーチング】

専攻医を対象に模擬ティーチングを行った。我々のチームは態度領域としてストレスコーピングをテーマに選んだが、一般目標が技術領域に寄った内容だった。「学習者に何を持って帰ってもらいたいのか」を意識することで、ティーチングで扱う領域と目標に整合性を取ることが重要だと感じた。また、他チームの振り返りで、学習者が集中できる環境にあるか、などオンラインだからこそ学習者の参加環境を考える必要があることが論点になっていたことが印象的だった。最後になるが、一人で参加してくれた専攻医にはとてもプレッシャーのか

かる状況だったと思うが参加してくれたことに感謝している。専攻医が一人であることで想定外の難しさがあり学びが深まったと感じた。(前田啓佑)

【修了課題発表】

終了課題としてカリキュラム開発や評価の能力を調べるために、受講生が各自の施設で行う教育実施計画書を作成した。

初期研修医向けの救急科担当講義の年間計画、初期研修医の総合診療科での研修カリキュラム（外来メイン）、同様の研修カリキュラム（病棟メイン）、地域医療に従事する若手医師を対象とした「お悩み相談会」、初期研修医と医学生が共に総合診療を学ぶ学習プログラムなどの発表があった。私は医学生の総合診療実習プログラムを発表した。他の受講生は知識、技術、態度領域に分けて個別目標を設定していたりプレモータルシンキングについても考察されており、参考になった。(吉國晋)

第8回オンライン開催 3月9日（土）

【卒業制作その後の発表】

2022年度に m-HANDS を修了された卒業生から、修了時の卒業制作(何らかの教育カリキュラムを作成して可能であれば実施してみるという課題)のその後について発表いただきました。オンライン診療について学習者（研修医）に学んでもらうというカリキュラムを立てておられ、実際の内容についてもかなり論理的、具体的に作成されておられたものでした。実施に関しては難しかったとのことで、その要因として、その先生が動かないと回らないカリキュラムだったこと、勤務先が変わって時間がなかなか取れなかったこと、などが上がっていました。2023年度のメンバーもどう実施に踏み込んでいけるか考える内容でディスカッションも活発で大変学びになりました。(大塚裕真)

【PF 発表会】

今年 m-HANDS を共に受講したメンバー6名の教育的取り組みについて各々が発表し、所属するプログラムで専攻医の振り返りに取り組んだ事例や、m-HANDS 内で行った模擬レクチャーに関連する振り返り事例などが共有されました。いずれの事例も発表者の内面的、感情的な要素が含まれる深い考察で、教育の奥深さを感じました。個人的に特に印象に残ったのは、心理的安全性と no blame culture の違いについてのディスカッションで、成長に繋がる心理的安全が保たれた場を作ることの難しさを感じました。とても学びの多かった8ヶ月でした。(川口満理奈)

